熊鷹 青空の美しき狩人

藤原審爾

熊鷹 青空の美

藤原審爾

文藝春秋

© Shinji Fujiwara 1982
Printed in Japan

熊鷹　青空の美しき狩人

一九八二年五月二十日第一刷

定価　九五〇円

著者　藤原審爾

発行者　杉村友一

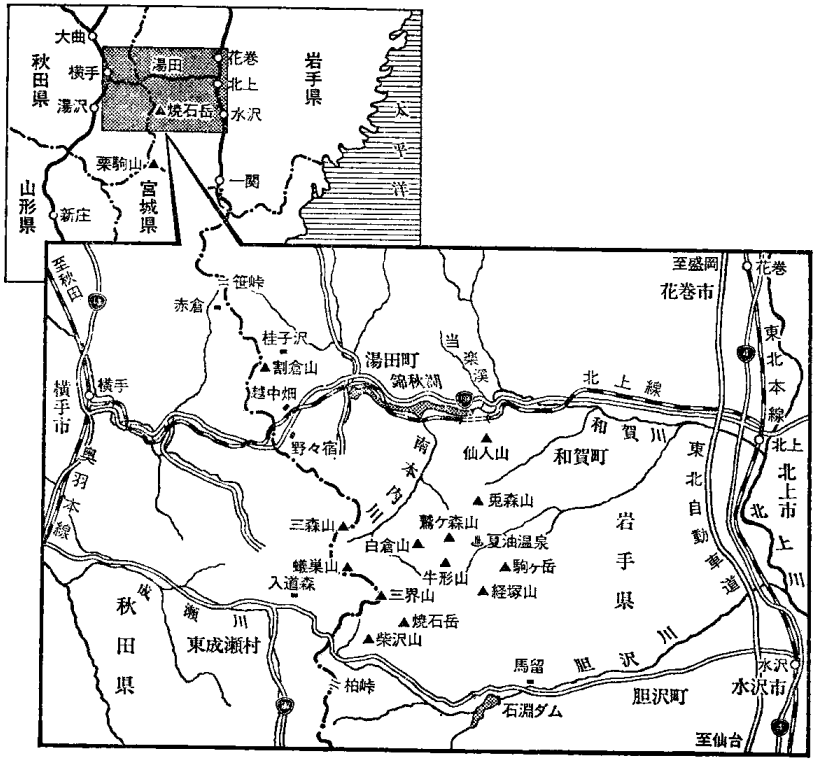
発行所　株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷　共同印刷
製本　矢嶋製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

熊鷹　青空の美しき狩人



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

深い森の中の濃い閑けさをやぶって、突然鴉(からす)たちのけたたましい叫び声と羽音が聞えだした。川のむこうの急な斜面の山の上のほうからである。二羽や三羽の叫び声ではない。川から少しはなれた森の中の日だまりの岩場で腰をおろし、にぎり飯を頬ばっていた寿太郎は、もう秋塒(あきねぐら)かと思った。温根湖の東から根室あたりの鴉たちは、秋になると湖の西の山へと移ってくる。短い秋をそのあたりですごすと、さらに西の山へ移り、風蓮湖の鴉たちと共に何千という群れになり冬塒に入る。しかしまだ八月半ばで、秋塒には少しはやい。あたりの聳えたつ樹々は、先頃若葉の季節を終えたばかりである。寿太郎はすぐ温根湖の架橋工事と道路工事のことを思いだした。夏中トラクターやハッパをつかった荒っぽい工事のために、はやばやと鴉たちは温根湖のほうからこのあたりへ逃げこんだのかもしれない。そういえば朝からなんども鴉の声を聞いている。束の間、鴉たちの叫び声と羽音が、空から寿太郎のほうへ雪崩れるように落ちてきた。にぎり飯を頬ばりながら寿太郎が、眉の濃い大きな目の顔を挙げると、斜め前のナナカマドやダケカンバの梢の青い枝葉に遮(さえぎ)ら

れた青空を、ひと群れの鴉たちがなにかを追いながら、すさまじい勢いで通りすぎていった。寿太郎は人間のくだらぬ掛引きや争いをみているより、鳥や獣をみるほうがはるかに好きである。急いで空を見渡せる川ぶちのほうへ、鉄砲を片手に出ていった。去年、魚釣りにきて鶴とぶつかってから、寿太郎は鉄砲を持ち歩くようになっている。川ぶちまで出かけると、森がきれ、眩しい青空が見えた。鴉たちに襲われているのは、大柄の鳶のようである。それも年老いた鳶らしく、あまり敏捷でない。それを六七羽の鴉がいためつけている。鴉は気むずかしい鳥なのである。海から鷗が陸へ餌さがしにくると、たちまち鴉は短い叫び声をあげて仲間を呼びあつめながら鷗を攻撃するくせに、自分たちは平気で鷗の猟場を荒しに行く。なぜ鴉たちが怒りだしたのか、理由はよくわからないが、闘志のなくなったような鳶を、執拗に追いかけまわし、攻撃の手を弛めない。よく見ると十羽ばかりもいて、若鴉が四羽ほどまじって飛びまわっている。八月の陽をうけてどこかの羽根が陽に輝くと、鴉の姿は見えなくなる。きずつき疲れた老鳶は、必死に上昇して逃げようとするのだが、鴉たちはそれを読んで素早く空高く二三羽が昇って行き、さきまわりして待つ。あとから必死で昇ってくる鳶を、追いあげる鴉たちとはさみうちにするのである。急降下して鴉は鳶にぶつかって行く。それを二度三度としつこく繰返しているのだった。鳥も獣も、必要なしにそんなことをしたりはしない。漸くそれが若鴉たちのための訓練らしいと寿太郎は気がついた。執拗なのはそのせいにちがいない。

鴉たちは包囲して鳶を攻撃したり、上と下ではさみうちにしたりしていたが、そのうち高い空で急降下攻撃をうけてぱっと羽毛を散らすと鳶は、力つきて空から落ちはじめた。寿太郎の横の川は、急な山の斜面のむこうに曲り、つい先のところから見えなくなっている。その斜面のむこうに鳶は半ば羽根をひろげたまま落ちて行き、五六羽の鴉たちがそのあとを追って急降下していった。さっと鳶が飛びあがってくることを、寿太郎は期待していたのだが、山の斜面のむこうから空へのぼってきたのは、鴉たちだけだった。どうやら鳶を倒してしまったのだろう、飛びあがってきた若鴉たちは、得意気に勢いよく飛びまわっている。あまり気持のよい結末ではない。寿太郎はそのはずみに足をすべらせ、よろけて川の中へ落ちこんだ。腰ほどの深さのところなので、べつに危険はなかったが、びしょ濡れである。陽が照りつけているので、辛抱していれば自然にかわくが、びしょ濡れのズボンで森の中を歩くのは疲れる。寿太郎は裸になって、濡れたズボンやジャンパー、シャツやパンツをしぼり、川べりの灌木にひろげて乾かしはじめた。体に吸いつかぬ程度の生乾きになるまでは、そう時間はかからない筈である。真っ裸で飯をすませ、鉄砲の掃除をし、水筒なんかをリュックサックにしまいこんだとき、川を流れてくる茶褐色の鳥に気がついた。かなり大きな鳥で、水の上に少しばかり翼をひろげて浮かびながら流れてきている。どうやらさっき鴉たちにいためつけられていた鳶らしい。翼やあちこちに羽根の逆立ったところがある。鳶は上流の岸辺の流木の溜ったところにでも逃げこんで助かったらし

い。このまま放っておけば、温根湖あたりまで流され、子供たちの石でなぶり殺しにされるようなことになるだろう。寿太郎は岸辺にひきあげておいてやろうと、すぐ川の中へ入っていった。むろんそんな気持が鳥にわかるはずがない。寿太郎が近よると翼で水面をたたき、大きな嘴(くちばし)をあけて威嚇する。飛べもしないのにすごく猛々しい。それに老いぼれ鳥ではなくて、まだ巣だちして間もない若い鳥である。鳶の仔にしては大きすぎるし、気魄(きはく)があって猛々しすぎる。鷲か鷹の仔かもしれない。それなら子どもの門多(もんた)のおもちゃになるだろう。若い鳥は流れて行くし、寿太郎は裸なので飛びかかってつかまえるわけにはいかない。鷲なら仔でもすごい爪を持っているのである。ちょうど流れてきた枯枝を拾い、寿太郎はそれであばれる若い鳥の胴をおし、岸辺まで行き、今度は腹の下に枯枝をさしこみ、岸へはねあげた。青草の上へ若い鳥があがると、寿太郎は川から駈けあがり、リュックサックのところへ行き、中から毛布をひっぱりだした。青草の上へあがった若い大柄な鳥は、左の翼を痛めており、飛ぶことはもとより翼をたたむことも出来ない。しかしありったけの力をふりしぼり、痛めた左の翼をひきずりながら、森のほうへばたばたと逃げて行っている。それを裸の寿太郎は、青草の上をとぶように追いかけ、森の日かげに入ったところで追いつき、ひろげた毛布をぱっとかぶせた。多分、若い傷ついた鳥は、毛布を敵だと思ったのだろう、横に転がり仰向けになり、両脚の爪で毛布をはげしく蹴りだした。寿太郎はそこへ飛びかかり抑えつけ、翼をたたみ、毛布でぐるぐる包みこんだ。小鳥は外

が見えなくなるとおとなしくなるが、その傷ついた大きな鳥も、瞬間、クックックッと哀しげな啼声を挙げたが、それきり声もたてずあばれもしなくなった。こんな土産が出来たので、寿太郎は山菜などをあつめる気がなくなった。いそいで生乾きのシャツとズボンを身につけると、木洩れ陽の森の中を厚床(あつとこ)のほうへ帰りはじめた。

漸くわが家にたどりついた時は、そろそろ陽が沈みかけていた。

寿太郎の民宿の寿屋と寿食堂とは、通りにむかったところにある。母屋はその奥の中庭をへだてたところにあり、そのむこうには裏庭につづいた田畑がある。寿太郎が田畑のほうの裏道から家へ戻って行くと、働き者の小柄な妻の貞子が物置小屋から、西陽の射している裏庭へストーブをだしている。

「おかえンなさい、テレビで明日から冷えこむと言ってたわ」

「ストーブはおれが出すから、ちょっと来いよ、門多はどこにいる?」

「家の中にいるわ、どうしたのよ」

「いいから来いよ、いいものをみせてやるからよ」

寿太郎は裏玄関から、門多門多とよびながら薄暗い土間へ入って行った。土間の正面に仕切りの壁があり、下駄箱がおかれている。その横の通路をどんどん寿太郎は奥へ入った。

左手が流しのある台所で、右にテーブルをおいた板の間がある。板の間の上り框へ鉄砲やリュックサックをおき、奥から出てきた三つのちっちゃい門多へ、うれしそうな笑顔で得意そうに言った。

「いいもの見せてやるから、そこでじっと待ってるんだぞ。おい、貞子、近よると危いから、むこうで門多を抱いていな」

貞子は働き者で従順な女房である。

「気味がわるいわ、なあに？　狸？」

板の間へあがって行き、テーブルのむこうの椅子で、門多を膝に抱きあげた。

「そんなケチなもんじゃないぞ」

上り框のところで、寿太郎は注意深く毛布をほどき、一重になると、毛布の上から両脚をつかみ、そっと若い鳥を持ちあげながら起こした。つかんだ両脚に力がこもり、鷹が鷹匠の腕にとまったような感じに起きあがった。

「鳥ね、鷲ね」

寿太郎はそっと毛布をはがしてやった。目が見えるようになった瞬間あばれはしないかと、用心していたのだが、その鷲の仔のような鳥は、まったくあばれようとしなかった。まな板の上の鯉のように、どことなく堂々としていた。胸をはり、凜然としていて、いかにも鳥の王者のような風格があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ママ、あれなあに？」
「あれはね、お鷲さんのこどもなのよ、鳥の王子さまなのよ。でも、どうしたの？　どうしてあなた、とったの？」
「温根湖のとこの工事で、あのあたりの鴉が、ずっとこっちに逃げこんできたんだな。その鴉達にやられて羽根を折って川へ落ちたのを拾ったんだ」
「怪我してるの、あんた、道理でかなしそうな目をしてるのね。よし、おばちゃんが診てあげるわね。鳩の羽根が折れたのを、おばちゃんは治したことがあるのよ。ちょっと見せてごらん」
貞子は表裏がなくて気立てがやさしいばかりでなく、こわいもの知らずのようなところがある。門多を膝からおろし、椅子へのせてから、鷲の仔へ近づいてきた。
「いい子ね、お母ちゃんが心配してるわよ、はやくよくなって帰らないとね、あばれちゃいやあよ、おとなしくしててね、きっとおばちゃんが治して、お家へ帰してあげるからね」
「おい、あぶないぞ」
「だいじょうぶよ、この子の目、怒ってないもの、いい子だもの」
もしかすると鷲の仔には、やさしい声や気持がわかるのかもしれない。鷲の仔は寿太郎につかまれた脚をしっかりとふんばるようにしていたのだが、急に強いふんばりが弱くなった。近寄った貞子がさしだした手を、嘴で突いたが、そのまま貞子の左手のほうへぐた

りと倒れこんでいった。寿太郎がつかんだ両脚からもすっと力がなくなった。酷寒の夜などには、鴉なんかでも凍え死ぬことがある。樹の枝にとまったまま死んで、雪の上へぽとりと落ちる。寿太郎は思わず、声をあげた。

「死んだか」

しかし鷲の仔は死んではいなかった。生れてはじめての戦いと手傷と飢えと疲労でうちのめされ、今にも死をむかえそうになったところだった。

「相当まいってるわね。でも、傷はそう大したことないわ、左の羽根が折れてるだけ。きっと助かるわ。ずっとまえに、鳩を助けたことがあるけど、その時はもっとひどかったわ。目蓋が半分おりてきていたもんね。あなた寝かせてやってよ。どんな処置をすればよいか、井田獣医さんに聞いてみるわ」

と貞子は隣の居間のほうに電話をかけにいった。寿太郎は上り框で垂れた毛布を拡げ、そっと鷲の仔をそこへ寝かせ、おそるおそるつかんだ両脚をはなしてみた。鷲の仔はちょっと脚をのばし、太い大きな爪をなにかつかむように縮めただけで、起きあがろうとする力もなかった。このまま生きのびれそうにみえず、寿太郎はなにかわるいことをしたような気分になった。どうせ死ぬにしても、こんなところでなく、鷲の仔は山で死にたいだろう。高い樹の上の枝で死んで、すうっと落ちていく様子が浮かんできて、寿太郎は気がとがめ、ひるんだような眼になり鷲の仔を見た。しかし鷲の仔はそんな寿太郎の同情などと

くらべものにならないほど、悠然と死にむかいあっており、まだ勇壮なものをその全身にたたえており、ぱちりと一つゆっくりまばたきした。

井田獣医も診療所の先生も、鳥の怪我の治療法については、ほとんど知識を持ちあわせていないばかりでなく、鳥の命にはあまり興味も持ちあわせていなかった。しかし貞子は、それで諦めたりなげやりになったりせず、看病にとりかかった。貞子はずっと前の子供の頃に、いちど鳩を助けたことがある。五つのとき両親を事故でうしなった貞子は、その時分おなじ村に住んでいる叔母にひきとられ、そこから小学校に通っていた。ある日、学校からの帰り途で、猫におそわれ半死になった鳩を助け、それを何日も抱いて寝て看病してやり、とうとう空を飛べるようにしてやった。学校の先生にはげまされ、それをやりとげたのだが、そのおかげで貞子は鳥や動物たちと親密になり、自信のようなものが出来、いきいき元気に生きられるようになった。むろん鳩と鷲の仔はちがったものだが、そういうことを貞子はあまり気にしなかった。夜になると門多を右側に寝かせ、反対側には鷲の仔を入れて、一緒に寝て看護してやりだした。二日経つと半死だった鷲の仔は、どことなく生気が出てきた。大きな鳥は数日なにもたべなくても、なんとかしのいで行くことが出来るのである。三日経ったあくる朝になると、貞子はくるんだ毛布から顔だけだしている鷲

の仔の嘴をこじあけ、

「さあ、お母ちゃんのところへ帰りたかったら、これをのむのよ、お母ちゃんだって、おまえを気ちがいみたいにさがしてるわよ、さあ、おあがり、おいしんだから」

などといつものにぎやかな調子で話しかけながら、少し薄めたぶどう酒を口の中へ流しこんでやった。ちょっと間をおいて、牛肉屋にもらったモツを、おなじように口へおしこんでやった。喉から胸を根気よく撫でおろしてやってのみこませるのである。果して鷲の仔が元気になるかどうか。ただ寝ているだけで見当がつかなかったが、五日目の朝になると、鷲の仔は見ちがえるほど元気になった。なんとなく異様な物音と気配で、貞子が目をさますと、横に寝かせている鷲の仔がいなくなっている。おどろいて貞子が起きあがると、鷲の仔は足許の南の窓の下にあるテレビの上にのぼっており、薄明らんだ窓の外のほうをじっと見ていた。窓から流れこむ仄白い光の中で鷲の仔のその姿が黒々と浮かびあがっている。物音一つしない夜明けが静かにはじまった中で、凝然と遠くを眺めているその姿は、すごく貫禄があり荘厳ですらあった。鷲の仔は生きかえったのである。あとは翼がなおり飛ぶことが出来るようになればよいのである。たちまち貞子は大きな歓びが胸いっぱいになり、寿太郎をよび起こした。とてもよろこびを一人で担うことが出来なかった。

「あなたあなた、はやく見てやって、あの子が元気になったわよっ」

その感動的な夜明けのとき、貞子はあとは翼が治ればよい、そうすればこの子はまた山

で親たちと暮すことが出来る、はやく親たちと一緒に青空を飛べるようにしてやろうと、心から思ったものだったが、たやすく思う通りには運ばなかった。だいいち歩くことが出来だすと、鷲の仔を部屋の中で育てるわけにいかなくなった。鷲の仔はちびの門多に特別の関心を持っており、門多も鷲の仔のそばへ行きたがるのだった。そばに行って門多をつつくのである。それにところかまわず排便するので、早速寿太郎は、裏庭の物置小屋の隣に鷲の小屋をつくってやった。四坪たらずの一間半と二間半の小屋で、右側の一間のところは板で囲い、残りのところは金網を張り、田畑のむこうの山々が見えるようにしてやった。自然木のとまり木を、板囲いのほうに埋めてやり、西北の山にむかったほうにも、木をわたしてとまるところをつくってやった。さらに金網の外には、吹雪をさけるために古い帆布の蔽いを、吊すようにしてやった。天気のよい日は、庇(ひさし)の下へまきあげておくのである。

鷲の仔は一郎と名づけられ、その小屋の中で暮すようになった。

「暗くなったら騒ぐんじゃあないかしら?」

貞子は一郎が騒いでくれるのをいくらか期待していたが、一郎はべつに騒ぎもしなかった。自分のいたましい運命をよく知っているように、さからおうなどとはしなかった。小屋の上段の枝へとまり、凝っと山のほうを見ながら、悠然と一郎は暮しだした。しかし一郎は餌のことになると気むずかしく、貞子が運んだものでなければ食べようとしなかった。

貞子は門多の面倒をみるだけでなく、民宿のほうや食堂の仕事もある。手がはなせないようないそがしい時もある。そんなとき寿太郎が貞子のかわりに餌を持って出かけると、一郎は、寿太郎の姿が見えなくならないかぎり、餌を口にしない。むろん店や宿を手伝っている連中が出かけて行くと、小屋の中へも一郎は入れない。信用しているのは貞子だけというふうだった。そしてそのうち貞子が餌をやりに出かけて行くと、一郎は、

クワックワッ

と甲高い声をあげてよろこぶようになった。これまで啞のように啼いたことがなかった一郎が、あまえるような啼声をあげて彼女を迎えた日の晩は、うれしくて貞子はなかなか寝つかれなかった。

雪が来る前に、一郎を山にかえしてやろうと、貞子と寿太郎は話しあっていたのだが、一郎の左の翼はなかなかよくならず、とうとうきびしい雪の季節をむかえなければならなくなった。日に日に田畑もその彼方の山なみも、白く雪に蔽われ、一郎の小屋の屋根にも雪が厚く降りつもっていった。

厳しい冬がつづき、やがて春になり、山の雪が解け山肌が斑らに見えだすと、一斉に青草の芽がふきだし、木々にも緑の芽がつきはじめた。小屋の中の一郎も冬のうちにひとまわり大きくなったばかりか、翼もよくなったらしく、時折とまり木のうえでばたばた羽ばたいたりした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com